

新口町

残る梅川・忠兵衛の墓

新口の地名が「二井ノクチ」として、承久三（一二二二）年の東大寺文書に初登場します。二井ノクチは「新居ノ口」とみられ、居が「住む」という意味であることから「新居」は、新しい集落を意味すると解されます。

文応元（一二六〇）年の東大寺文書に「新口の荘」が見え、同町に隣接する葛本町の安楽寺にある慶長年間（一五九六―）碑文にも「二ノ口村」とありますので、地名が遅くとも中世の平安時代に生まれていたものと考えられます。

浄瑠璃・冥土の飛脚（めいどのひきやく）で、江戸時代中期に新口村が有名になります。宝永七（一七一〇）年の津藩日記・永保記事略に、同村の「小百姓・四兵衛のせがれ清八（亀屋忠兵衛）が大阪の養子先から金銀を盗み、ほれた遊女と逃げ大和で捕まった」とあり、この史実を当時の浄瑠璃作家・近松門左衛門が新口村を舞台に心中劇化したものです。忠兵衛と遊女（梅川）は当時、処刑されたのでしょうか――。

二人の名を刻んだ墓が同町の善福寺境内に並んで残っており、いまでも墓を訪ねる人たちの哀れ涙を誘っています。